

---

# 地下牢

輪島ケイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

地下牢

### 【Zマーク】

N8097C

### 【作者名】

輪島ケイ

### 【あらすじ】

地下牢に閉じ込められた男と、訪れた者との対話。

## 過ちは繰り返す、輪の1とく

木の階段を軋ませ、黒衣の人物が湿つた地階に足を踏み入れる。黒い頭巾を田深にかぶり、表情はおろか性別さえ伺いしれない。僅かばかり覗き見える鼻と頬は、秋の氷雨に濡れて蒼白。薄く形よい唇だけが、紅を塗つたように血の色を透かしていた。外套は何の装飾もない粗末なもので、その下に着込んだ服も黒一色であるのが見て取れるだけである。

窓のない牢獄の空氣はカビ臭く、黒々とした石壁は獄吏の手にした松明の灯りに照らされ、より暗い、無数の影を産み出していた。

獄吏は鉄の輪に鍵をじゅうじゅういわせながら鉄格子の前で足を止めると、連れを振り返つた。

「こちらでござります。今は大人しくしありますが、もし暴れたら呼んで下さいまし。聞こえる所にありますので」

重たい錆びた扉を両手で引っ張り、開いたところで脇に避ける。

訪問者は軽く頷き、抑えた声でこう言つた。

「落し戸を閉めて、呼ぶまで2人にしてくれるか」

教養のある話し振り、皺がれのない若者の声だ。さればこの者は男であつたかと、獄吏の老人は独りじめる。

「畏まりました。じゆるりと」

男の背後で扉は閉ざされ、錠が元通りおろされる。

松明を壁に残し、老人は上階に戻つていった。ややあつて落とし戸の閉まる音が響き、黒い訪問者は地階に残された。

黒衣の若者は薄暗い牢屋を見回した。天井近く申し訳程度に空けられた明かり取り窓には無慈悲な格子がはめられ、そこから雨が吹き込み、床に水溜りを作っている。火の氣のない地下牢は骨身にしみて寒く、鎧びた鉄と、尿と、すえた臭いがこもっていた。

陰になつた視界の隅で、うごめく物があつた。背けられていた頭がこちらを向き、生氣のない眼が侵入者を見つめる。若者はゆっくりと頭巾を下ろした。

囚人の眼が驚きに見開かれた。かすれた声で弱々しく呼びかける。  
「来てくれたのか」

頭巾の下から現れたのは、年の頃二十歳ばかりの修道士の顔だつた。高い頬骨をもち、鼻筋の通つた端正な顔立ち。短い黒髪は松明の灯りに背後から縁取られ、あたかも絵の中の聖人のごとく光を放つているように見えた。血の氣のない石像のような顔の中で、黒々とした両の眼だけが、生きた者らしく意志を持つて囚人を凝視している。「来てくれるとは思わなかつた。まさか…」

「誰も面会に来ないのでですか」

言葉を遮つて僧は口を開いた。部屋の中には小便を入れる壺と、備え付けられた木製の寝台、床に置かれた木の食器以外は何もない。

毛布もなく汚れた藁の上に横たわつた囚人は、両手に頑丈な手枷をはめられ、鎖で壁に繋がっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8097c/>

---

地下牢

2011年1月4日04時44分発行